駒ヶ根市公民館報

館報 駒ヶ根

2024年
3月12日

vol.168

■ 撮影者　今井 和男

公募写真テーマ『希望』

■ 今年は年明けから地震災害や航空機事故など大変な事が起こりました。まさに、この一年の無事を祈らずにはいられませんでした。そんな気持ちでこの写真を撮りました。

※今号の表紙写真は応募いただいた写真を使用しています。

次号 館報『駒ヶ根』169号

表紙写真募集
テーマ『輝き』

詳細は申込みフォームをご覧いただくか、
各公民館へお問い合わせください。

※申込締切は2024年5月16日(木)まで

こどもと親と社会を結ぶ活動

『親と子学び育ちの会　まねきneko（通称：まねきneko）』は、2016 年4月にお母さんたちが立ち上げた子育てサークル団体です。代表の北澤孝代さんにお話を伺いました。『まねきneko』は、お子さんが所属するサッカークラブでリーダー的存在だった方が急逝された際、その方のお子さんを「親仲間に託したい」と言葉を残されたことが立ち上げのきっかけだったそうです。

会の名称には、「障がいの有る無しにかかわらず、その子らしさ、その人らしさを大切にし、人を呼び・仲間を呼び、陽だまりの中でくつろぐ猫のように安心して暮らせる地域をつくりたい」という思いが込められています。

『まねきneko』では「当該児・者」「保護者」「支援者」「有識者」が集い「こどもの居場所」「学びの場・交流会」を通し、彩りのあるやさしい未来をつくるために、様々な方との交流や繋がりを大切に結ぶ願いを込めた『ゆいちゃんち』をシンボルに掲げて、独自の活動を行なっています。

親御さん向けには、長野県障がい者共生条例に沿った、情報発信や子育て講座などを開催。

お子さん向けには、学習支援や公民館等でこども同士の交流にeスポーツを定期開催するなどの居場所作り。大学生までを重点的に支援する対象とした食事や食糧支援を行っています。

多世代向けには、季節ごとにイベントを開催。食事・食糧支援やeスポーツ体験、絵本読み聞かせやワークショップ、親子でお好み焼きを作る体験など、誰もが参加しやすい交流の場を作っていて、「気軽に来れた」「大人も楽しい」と好評です。

年に数回、駒ヶ根駅前ビル アルパで誰もが気軽に参加いただけるイベントを開催しています。ホームページ、Facebookに案内が掲載されます。

ホームページ

Facebook

活動のひとこま

「縁日」が育む子どもたちの笑顔

市内中心部にある銀座通り商店街で、毎月第３日曜日に「子育て地蔵尊すくすく縁日」が開催されています。この縁日は2011年より始まり、途中コロナ禍で２年ほど休止期間があったものの、なんと今年１月に第120回の節目を迎えました。綿あめや、射的やくじ引きといった縁日定番の遊びには毎回行列ができ大人気です。夏にはかき氷、秋冬には豚汁が振る舞われる回もあり、子どもたちの記憶に残る「祭り」として定着しています。

この縁日を主宰されている『あつい！こまがね』の代表原さんに始めたきっかけなどを伺いました。この団体は、町四区自治組合で区長・町内会長を一緒に経験し絆を深めていた「思い出会」が元になっており、市街地の活性化を目指しています。長野県地域発元気づくり支援金の対象事業になったことで、出店希望者への貸出用テント２０張りの購入が可能となるなど、初期の段階から経済的な基盤を作ることができました。また、個人的に「子どもたちのために使ってほしい」と、折々で活動費を寄付してくださる方がいたおかげで、綿あめなどを継続して無料提供できているそうです。「こうして長く続けてこられたのは全て賛同して参加してくれるスタッフのおかげ。彼らがいなければ続けてこられなかった」と深く感謝されている様子が大変印象的でした。

最近では青年海外協力隊駒ヶ根訓練所からのボランティア派遣も復活し、小中学生から出店希望の相談が来ることも増えたそうです。実際に、第120回は赤穂小学校の５年生が出店し、五平餅1200本を完売させるなど、雨天にも関わらず大賑わいでした。

「縁日で楽しい思い出を作って育った子どもたちが、自分の子どもを連れてまたここへ遊びに来てくれるのを楽しみにしている」と仰る原さん。縁日の定着と共に、若い力や新しいアイディアを呼び込む好循環が生まれています。今後も長く愛され、この場所で楽しい思い出が増え続けることを期待したいです。

雨でも賑わう

分館紹介　No.3

町一区分館

2023年9月1日現在
816人
区加入世帯 288戸

町一区分館では『倶（とも）に走り継ごう』を令和５年度のスローガンに掲げ、年間事業計画をコロナ前のボリュームで立案しました。準備段階で「コロナ前はどうだったっけ？」というようなシーンもありましたが『まず自分たちが楽しんじゃおう！』を心掛け、多くの方の助言や協力をいただきながら、思い付きやひらめきを活かした、ある意味『新しいもの』として運営に取り組めた気がします。

年間の主な行事を紹介します。6月に区民交流会を実施しました。これまではバレーボールやソフトボールを町内対抗で行っていましたが、幅広い年代の方が参加できるように、レクリエーション的な催しに切り替えてきた経過があります。今年度は、ティーボールや綱引き、じゃんけん列車、○×クイズを町内対抗で行いました。慰労会は表彰式を含めて赤須町地域交流センターで盛大に

中　沢

ご存知ですか？ ―公民館運営審議会―

戦後、全国に公民館ができて70年。高齢化、人口減少が深刻な地域社会の中で、社会教育の拠点としての公民館には『人づくり、地域づくり』の役割を期待する声が一層大きくなっています。

市内には赤穂公民館、東伊那公民館、中沢公民館があり、地域住民の学習の場、交流の拠点として、なくてはならない地域の核となる施設です。各公民館には、館長の諮問に応じ、各種事業の企画実施について調査・審議する公民館運営審議会が設置されています。

その一つ中沢公民館の審議会が12月5日に開催されました。この日の審議会では、令和5年度の公民館活動状況の経過報告と、来年度の公民館事業についての説明がありました。公民館の学級講座については「内容が充実している」「生涯学習の場として続けて欲しい」等の意見がありました。

続いて運動会や各種スポーツ大会など分館対抗事業について、「人口減少や高齢化のため、参加者を集める事が難しい」等の声について議論されました。「分館事業は地域になくてはならない事業」「分館役員の負担が大きければ、運営方法を全体で考えていく必要がある。一度辞めると復活は難しい」という意見、また対処の方法についての提案もありました。「スポーツ種目を工夫し、参加要件を緩和したり、子どもたちの参加を広げられたらいい」「人数の少ない分館は合同での参加を促す」「運動会は都会にはない楽しい事業、移住希望者等にアピールする場として活用したらどうか」等、活発な意見交換が行われました。

地域では、防災や農地の維持管理、子育て、在宅介護など住民同士の助け合いが不可欠です。そうした中で分館事業は世代を超えて人と人を縦に横に繋ぐ大切な役割を担ってきました。その役割をこれからも果たして行くために、委員とともに地域住民みんなで地域のあり方を考えていきたいものです。

公民館運営審議会の様子

東伊那

へたがいい絵手紙

東伊那公民館の絵手紙教室は7年前公民館講座として始まりました。4年前から自主運営の文化団体となり、月1回開催し、生徒数は現在8名で活動しています。

絵手紙とは、絵を描き添えた手紙。形式の制約はなく、葉書を使い、絵に簡単な文を添えるもので、モットーは、**『へタでいい　へタがいい』**のため、会の名前も『へたがいい絵手紙』。ヘタでいいので失敗が無いとの事。下書き無しでぶっつけ本番、筆の一番高いところを持ち、線はゆっくり、色は素早く、物を素直に描く事を意識して、1枚5分～10分程度の短時間で描き上げます。

教室では、時にうちわや扇子に描いたり、ふるさとの丘の風景や県内へスケッチ旅行に行ったりしているそうです。年末には消しゴムハンコを掘り、年賀状制作も恒例行事になっています。

講師の村上美春先生は、社会貢献として、激甚災害等の被災地に絵手紙を送り、元気を届けることなども行っています。また、中沢小学校のクラブ活動の講師もされています。基本の草花や果物等の絵を描いたりしています。芋ハンコ作りの日のエピソードとして、焼き芋を持ってきた児童がおり、持たせてくれたおじいちゃんの気持ちを汲み、美味しく頂いたそうです。

教室に伺った日、会員がかつて思いを寄せた方に「リンドウの花に、あなたのぬくもりを感じたいと言葉を添えてポストへ投函した」と話された時、描く手が止まり、爆笑と微笑ましい歓声が沸きました。皆さん、とても楽しそうで笑いが途切れない和やかな教室です。

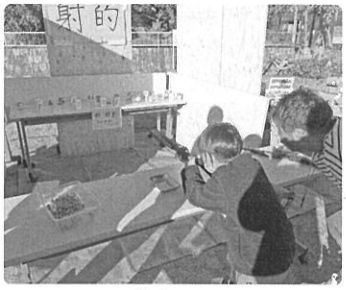
チョットやってみたいなと興味を持たれた方、東伊那公民館へ問い合わせてみてください。体験もできますよ。

絵手紙描き

展示会風景

ができました。
には「区民秋まつり」を5年ぶりに開催しました。屋台や射的、eスポーツ演奏、キッチンカー、そしてみゆき公園に設置したイルミネーション等を行い、小さなお子さんから年配の方まで多くの皆さんが集まり、り区民同士の交流と親睦を深めることができました。
分館ではこのように区民が楽しく交流できる場を毎年企画しながら、皆さんで組織する明星会のほか、育成会や地区PTA、子ども会、そし所属団体であるママさんバレー・野球愛好会・ナイターソフト・マレッ司好会・カラオケクラブ・祭典青年団の皆さんと倶に社会教育の推進、の定着を目指した継続的な取り組みをしています。

交流会　ティーボール



秋まつり

東伊那の宝物『高遠藩下賜具足』

東伊那公民館 館長　春日由紀夫

東伊那では江戸時代から明治時代に遷るとき、時の高遠藩第八代藩主 内藤 頼直公より地区の各神社に下賜された『具足』（鎧兜）があると言い伝えられてきました。

今回、区誌の編纂にあたり、各神社の総代様の全面的な協力のもと、神社の宝蔵や集会所等を調査し、結果四つの具足を発見しました。

まず高鳥谷神社の具足から紹介します。

具足名　黒漆塗切付小札紫糸毛引威二枚胴具足

これは、東伊那の村社である高鳥谷神社に下賜されたものです。保存状態も比較的良く、江戸時代の美しい姿を止めています。かつて藩主の親衛隊が揃いで身に着けた、十三領のうちの一領で、大切にされていたようです。この具足には、水筒や草鞋など貴重な付属品なども一緒に保存されています。

次に紹介するのは、「塩竈神社」（塩田）に下賜された具足です。

具足名　黒漆塗茶糸威菱綴桶側二枚胴具足

最初から所在がはっきりしていた具足です。地域の皆さんが代々受け継ぎ、保存状態も良好です。「江戸廻六番」の記録があり、江戸藩邸から運ばれてきたのではないかと思われます。黒漆の光沢も美しく往時の威厳が偲ばれます。

三番目は、「伊那森神社」（伊那耕地）に伝わる具足です。

具足名　黒漆塗碁石頭切付伊予札萌葱糸素懸威二枚胴具足

欠損している部分も幾つかありますが、共に発見された『書付』に、明治四年と書かれており、版籍奉還時に下賜されたことが分かります。高遠藩から村役人に対し、村人の苦労に報いるためとしつつ、「役人共へ」の文字が、当時の身分関係を物語っています。由緒来歴のはっきりした、貴重な地域資料です。特徴的な兜は六枚の板を貼り合わせ、土台の表面に漆を平滑にした「一枚鉢」という作りで、萌葱色の威が美しい具足となっています。

最後は、「筥石神社」（大久保）に下賜された具足です。

具足名　栗色皺革包紫糸威腰取菱綴桶側二枚胴具足

全体を皮包みにした非常に珍しい作りになっています。また、関係資料によると、嘉永六年のペリー浦賀来航に際し、江戸で防衛の軍備を整えるために、国元から送った具足の一部だとのことです。幕末の緊迫した様子や、歴史の大きな動きを肌で感じることができる、貴重な郷土資料となっています。ただ残念なことに、全体的に損傷が激しく、通常の形で組み上げることが出来ません。甲冑の専門家によれば、「地域の皆さんがこの具足を誇りに思い、ずっと神社に飾っていたのではないか」とのこと。損傷ありとて、大切な地域資料です。

以上紹介した以外、栗林神社（栗林）には、同じ時に「撓」（武具の名。近世の軍陣の標識とする指物の一つ）が下賜されています。残念ながら今回の調査では発見できませんでしたが、継続調査したいと考えています。

百五十年ぶりに集まった鎧兜の姿には、今まで東伊那を支え、守ってきた地域の人々の姿が重なります。これからも『東伊那の宝物』として後世に伝えていきたいと考えています。

編集の窓

我が家の犬は、静かでおとなしいが、「超」が付くほどの臆病者で、1歳で迎えた当初は絶えず震えっぱなしであった。3年目にしてようやく散歩を始めたが、最初の3か月ほどは直ぐ逃げ帰るため、10キロの体を抱いてしばし移動し、降ろした所から戻る訓練を繰り返した。

散歩が楽しみになった今でも、玄関までは抱けと頑として動かないことが多く、面倒くさい犬だが、散歩中は辺りを嗅ぎまわる楽しそうな姿に、「時間はかかったけれど慣れてよかった」と感慨深く思う毎日である。

（池田恵子）

連絡先
赤穂公民館　TEL.83-4060
中沢公民館　TEL.83-5125
東伊那公民館　TEL.82-4664

編集・発行
編集／駒ヶ根市公民館報編集委員会
発行／駒ヶ根市公民館協議会
印刷／株式会社宮澤印刷